

幾山河

第二號

平成元年 7月1日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

企画運営にご参加を	
林 茂樹	2
啄木と牧水	上田治史 4
沼津牧水会の足跡	6
「牧水みなかみ紀行」	
を往く	大林永一 12
催事報告	16
・第35回沼津牧水祭	
(碑前祭・芝酒盛)	16
・短歌大会	馬田暉子 17
・文学講演会	20
・短歌会	21
・サロン音楽の夕べ	22
・絵で見る牧水短歌の世界	
	23
定款・後記	26

企画運営にご参加を

林 茂 樹

沼津市若山牧水記念館が昭和六十二年十一月一日開館して一年有半、二万人を越す人々においていただき、素晴らしい記念館だとの評価を得、よろこびにたえません。

これも、記念館建設へ向けての長年にわたる運動を辛抱強くご支援くださった多くの方々、また貴重な資料を快くご提供くださった方々、そして、社団法人沼津牧水会の会員として記念館の運営にご協力くださっている三百九十名の会員の皆様のおかげであり、心から感謝申し上げます。沼津市若山牧水記念館は、歌人若山牧水の顕彰のみならず、教育文化の振興、地域社会活性化の役割をも期待されており、今後、この期待にこたえていかなければならないと思っております。すなわち、社団法人沼津牧水会は、沼津市若山牧水記念館の管理運営を沼津市から受託することを最も大きな事業としておりますが、同時に、沼津牧水祭の運営、文学講演会・文学講座の開催、出版物の刊行などの事業をとおして、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深めるとともに、短歌文学の普及を図りつつ、教育文化の振興に寄与することを目的として、昭和六十二年七月一日設立されました。

社団法人沼津牧水会の前身である沼津牧水会は、沼津牧水祭（碑前祭と短歌大会）を開催することによって、歌人若山牧水を顕彰するためにつくられた任意の団体でした。したがって、会員は、年に一度、沼津牧水祭を運営するために集まるといった組織でした。私も、若山家の菩提寺としての乗運寺の住職であるという唯それだけの理由で、先代住職の後を受け、会長という職を引き受けてまいりました。しかし、沼津牧水会が、新たに多数の皆様のご参加を得て法人化され、沼津市若山牧水記念館の管理運営を委託される組織として発展した今日、理事長として、その責任の重さを痛感しております。

そこで、今日までの会並びに記念館の運営を振り返り、今後の在り方について考えてみたいと思います。



本会は、主として会員の皆様の会費によって運営がなされております。したがって、会の運営をより健全なものにするためには、さらに多くの方に会員になっていただき、会の企画運営に積極的にご参加いただきたいのです。

社団法人発足以来、会員数は今日までほとんど変わりなく、会の活動にも会員の皆様のご参加がいまひとつという状況にあります。これは、会が歌人を中心とした文学集団との先入観があるからかもしれません。しかし、先にも述べたように、本会は社団法人として新たに出発し、幅広い活動を通じ教育文化の振興に寄与することをめざしており、歌人や文学者などが牧水及び牧水の短歌について専門的な研究をするばかりでなく、広く文学や歴史など文化に親しんでもらえる機会や場として、本会の活動があり、記念館もそのためにこそあると考えております。

そこで、より多くの方に会員になっていただき、今後どのような事業をしていったらよいか、企画・運営についてご意見をお寄せいただきたいと思うのです。より多くの皆様にご参加願うことにより、多様な内容が事業に盛り込まれ、会の運営に常に新風が吹き込まれることが期待されるからです。

本会の活動を会員にとって魅力あるものにすることによって、会員の皆様の事業への参加意欲が高まり、記念館の施設も大いに活用いただけるのではないかと考えております。

会員のみならず、沼津市民をはじめ多くの皆様に親しんでもらえる会、記念館にしていきたいと願っております。皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成元年 四月

(社団法人沼津牧水会理事長)

啄木と牧水

—平成元年五月
啄木祭に参加して—

上田治史

ご紹介頂きました上田でございます。この度お招きを頂きまして、沼津から玉城先生と一緒にこの地を訪れることができ、前から計画していた渋民の啄木祭に参加することができました。今この高い壇に立ちまして少し緊張していますが、色々な思いが私の中を行き来しております。それらを思い付くままお話することに致します。

私が初めてこの渋民の啄木記念館を訪れたのは、丁度十年前、昭和五十四年九月であります。啄木記念館建設の計画はその頃ようやく人々の口に乗るようになった時期で、そんなときに歌の仲間が声を掛け合って、半分見学、半分遊びというふうな気楽な旅行を計画いたしました。何処を見るよりも先ず啄木記念館を参考にということで、啄木研究家の大悟法利雄さんなども加わり、総勢十人ほどでこの地を訪れたわけでありました。

当時はまだ新幹線がありませんで、渋民は随分遠いところだなあという感じでした。ちなみにそのときの行程を申しますと、前の晩十一時五十分上野発の特急寝台に乗りまして、盛岡に着いたのが翌朝の七時でした。つまり東京と盛岡間の所要時間はおよそ八時間だったわけです。この度は午後一時に出て四時十九分に着きましたから、ほぼ半分になっていきます。そのことにも驚いたのですが、更にもその上こちらの記念館がまた、このまえ見たときとは比較にならないほど規模も内容も立

派に完成されておりまして、月並みないい方ですが、世の中がすごい早さで変わっているというところを、実感として受け止めている次第でございます。

ところで、私達のように沼津に住んで居て、多少なりとも若山啄木に関心をもっている者にとりましては、石川啄木という存在は実に宿命的とも言える相手であります。まさに切っても切れない関係があつて忘れることのできない人なのです。無論同時代の作家ということもありますが、単にそれだけではないようです。二人のあいだには作品の上にも実人生の上にも、比較対照してみたい要因が、じつに複雑に微妙に絡み合っておりまして、並べて考えずには居られない、というところがいっばい見えているのです。

大ざっぱに眺めてみましても、つぎのようなことが挙げられます。啄木は日本列島の南端、九州宮崎県の山村に、呑気で貧しい医者の子の長男として生まれています。啄木の方は東北の田舎の小さなお寺の、神経質で頭の切れそうなお坊さんの長男です。医者と僧侶というところに注目したいのです。啄木は明治十八年生れ、啄木は明治十九年です。そして故郷を離れた啄木の中には死ぬまで生地の尾鈴山が見え、啄木にはなつかしい岩手山があつたようです。二人が自分の故郷にたいして、同じように後ろ髪引かれていたことが、次の

歌を読むとよく分かります。

ふるさとの山にむかひて言ふことなしふるさと
の山はありがたきかな 啄木

ふるさとの尾鈴の山のかなしきよ秋もかすみの
たなびきてをり 啄木

啄木が生まれたとき母親マキは三十八歳で、姉が三人いました。啄木の母カツは四十歳で、ここには二人の姉が居たのです。どちらも中年を迎えての出産で、姉たちが弟の育児に参加していることもよく似ておりまして、これも見逃せないことの一つです。そして最後に、これは全く偶然なのですが、啄木が少年期を過ごしたお寺の山号が「万年山」ということを今度知りました。実は啄木のお墓のある沼津の乗運寺は、山号が奇しくも「千本山」というのです。

二人は深く関わつたといつても、現実には顔をあわせてから死別するまでの期間は僅かに一年半、あつという間のことでした。生きていた時の二人の歌人が、誰よりも相手をよく理解し、意識し合つていたことはふたりの書いたものを読むとはつきりしてきます。

明治四十四年二月三日、啄木は初めて啄木の家を訪れております。このときの啄木の日記には、極めて短いものですが、二人の人の柄を鮮明に表わす興味深い記録があります。読んでみます。「夜、若山啄木君が初めて訪ねて来た。予は一種シニツクな心を以て予の時世観を話した。声のさびたこの歌人は、『今は實際みんなお先真暗でございますよ』と癖のある言葉で二度言つた」というのです。明治四十五年四月十三日朝、啄木は計り知れない可能性をもつたまま、波乱に満ちた短い一生を

終りました。その最後の枕元に牧水がひとり居たという事実は、啄木にとつても牧水にとつても大変重要なことで、これを単なる偶然だけでは片付けられないものを感じられます。

妻節子さんの知らせを受けて、その朝啄木の家に駆け付けたとき、病人は瘦せ衰えて意識も定かではなかったといひます。牧水が枕元に座つても「もう大丈夫だからしつかり給え」というと、啄木は初めてにつこり笑い、しばらくしてから、「僕は死にたくない」と言つたそうです。（秀才文壇・大正元年九月号「石川啄木君と僕」より）啄木の容体はこのあとまもなく急変します。牧水は慌てて長女の京子さんを探しに外へ行き、戻つて来たときは父親の腕に抱かれて息を引き取つたところでした。一か月前に先立つた母の後を追つたことになり、僅か二十七年の生涯でした。

牧水の方はちょうどこの頃、初恋の女園田小枝子とのあいだが破局を迎え、混乱のどん底に居りました。劇薬のヒソをもち歩いたり、ときに「死にたい」などといつていた時代だったので。どのような気持で才能豊かな同年の友人の死に立ち会つたか、想像に難くありません。明治末期の歌の世界に、孤立無援の牧水と満身創痍の啄木の姿が一際くつきりと映し出された一瞬でした。このときのことを牧水は五首の歌で伝えています。「はつ夏の疊りの底に桜咲きをり衰えはてて君死ににけり」はその中の一首であります。

今度の玉城先生の啄木祭での講演を企画するに当たりまして、財団法人石川啄木記念館の評議員で、啄木研究者である遊座昭吾先生と何度か打ち



玉山村洪民 石川啄木記念館

合わせをしてみました。時には電話で、時には三人で酒を飲みながらのこともありました。「啄木の村」と「啄木の町」はもともと縁があるのだから、これからはもつと関係を深めてもいいのではないかとというのが、以前から先生の持論でありました。そのことがまるで預言でもあつたかのように、この度沼津と盛岡のあいだに、突然一本のホットな路線が敷かれたのです。

どう言うことかといひますと、つい先頃、盛岡大学の理事長に沼津学園の是村理事長が就任するという、全く思いも掛けない新しい事態が生じたのです。しかも遊座先生は盛岡大学の助教としてすでに教壇に立たれて居ります。このことはも

しかすると洪民と沼津の関係にも、何かしら特殊な流通をもたらすのではないかと、最近しきりに思われてならないのです。

今日はこのあと一日中、講演や、短歌会、懇親会など各種の催しが詰まつていようように聞いております。私も啄木を育てた洪民の空気に、一日どっぷりつかつて帰るつもりでおります。皆様もどうか何時の日か機会がありましたら沼津を訪れ、牧水の記念館を見ていただきたいと思います。

以上思い付くままを申し上げ、ご挨拶に代えさせていただきます。ご清聴を感謝致します。

（注記・文中の遊座昭吾氏について。氏は洪民の万年山宝徳寺と深い関わりをもつ特殊な立場の啄木研究者である。つまり、氏の祖父に当たる宝徳寺十四世住職の遊座徳英師が明治十九年に急逝し、その後継として啄木の父石川一禎師が、かなりの曲折を経たあとで転任してきた。啄木の生後一年のときである。ところが明治十八年に至り、一禎師が宗費滞納のことで任職罷免の処分を受け、寺を去ることになった。そのあとを継いだのが遊座昭吾氏の父君遊座芳筍師であつた。芳筍師病没のあとには実兄の芳夫師が継いでいる。さらに十八世の現住は甥の芳章師が当たつていり、昭吾氏自身もこの寺で生れ育つた人なのである。この因縁について遊座昭吾氏は、実際は「遊座家と石川家の両家で宝徳寺の法灯は守られた」としながらも、「半面、人生の裏側から見れば、石川家によつて遊座家は追われ、遊座家によつて石川家は追われたことにもなる」と述べているのである。）

沼津牧水会の足跡①

牧水顕彰会から

社団法人沼津牧水会まで

創刊号で佐藤茂正氏が提案しているように、牧水会創生の頃の記録は、一つの歴史として、きちんと整理される必要があるだろう。今号から会報の貴重な紙面をさいいて、沼津歌人・東海短歌そして、沼津朝日等の記事から、青木朝子さんが丹念に拾い上げた覚え書きをもとに、まさに議事録的にその成立の過程をまとめることにした。

昭和二十三年、当時、沼津市長であった長倉宜一氏との話し合いのなかから、「牧水祭」を持つてではないかということになり、そのころ、沼津市に組織されていた「岳麓歌人聯盟」では、積極的にこれを受けて立つことになった。そして盛大な講演会と遺墨展とが開催されたが、その経費は一切長倉氏のポケットマネーでまかなわれた。これが戦後、沼津市における最初の「牧水祭」ではなかったかと思う。

その後、しばらく牧水についての関心は高まらなかったが、その業績は何としても顕彰しなければならぬ、そうするなかで沼津の文化をたかめることもできるのではないかと、といった考え方が「沼津歌人」（現在の東海短歌の前身）の人達のなかから湧きおこった。そこであちらこちらによびかけて、「牧水祭」を開催しようとしたが気運が熟

さず、余儀なく「沼津歌人社」の単独主催で「牧水」をしのぶ会」を催した。昭和二十八年の秋である。これは思いのほか盛会で好評だった。

こうしたことがひとつのきっかけをつくり上げたばかりでなく翌昭和二十九年はたまたま牧水の二十七回忌に当たるということで、ぜひ豪華な「牧水祭」を開催しよう。また、して欲しいといった声があちこちから湧きおこった。そこで当時結成されていた「牧水会」が音頭をとって、はじめて市民的な「牧水祭」が持たれたのである。その後「牧水顕彰会」が組織され、毎年さまざまなかたちで「牧水祭」を開催し、年々その意義も高く評価されて来た。

積 惟勝

― 後 略 ―
三十三年九月「人間牧水を語る座談会記録後記」より

昭和二十七年十二月

……この秋には郷土の歌人牧水を顕彰する意味で「牧水祭」を開催するつもりであったが、とうとう出来なかった。実に残念である。 積 惟勝

（沼津歌人十二月号 一か年の回顧より）

昭和二十八年八月

「牧水祭を今年こそ」

沼津を愛して住んだ歌人若山牧水を偲ぶ催しは、昨年も企画したが実現しなかった。そこで今年こそは、我々の手で実現しようと六月歌会で申し合せた。時期は十月とし、講師に若山喜志子、土岐善麿の両氏、会場に産業会館を予定した。啄木祭に劣らぬ全市民的な催しにしたいものである。

（沼津歌人二十号より）

昭和二十八年十一月

西高講堂で催した「牧水を偲ぶ会」が現在盛況の「牧水祭」の第一回に当たるものだが、寒中の中を参集した人四百余名隙間風を防ぎながら、私は戸外に居たことを思い出す。 久田 二郎

あの頃 かの入 東海短歌三〇〇号特集より
（五十三年二月号）

昭和二十九年

沼津歌人社案内に

……略 次の仕事をします。

3、啄木祭・牧水祭等の開催

（はじめて牧水祭を行事として案内している）
（沼津歌人二十一号より）

明日の短歌のために

「沼津歌人」の反省をもとに 積 惟勝
前略―秋には「牧水を偲ぶ会」を開催した。
何せ牧水といえば歌聖とまでいわれた人であるから、この土地では誰一人知らぬものもない程知れわたっている。それだけに神経をつかった。いうところの町の顔役あたりにまで、細かい神経をつかったわけであるが、その割には余りパツとしなかった。これは、会場が町から離れすぎているということ、また、宣伝も徹底しなかったということなどが、批判の対象として挙げられたのであるが、しかし全市のな会合にまで高め得なかつたということは、私たち「沼津歌人社」の力の弱さを露呈したものである、充分反省され、今後の努力が要請されるわけである。後略

第一回 牧水祭

昭和二十九年

牧水二十七回忌

準備委員 市役所関係、沼津歌人社、山脈会、

主催 牧水会

後援 市・市観光協会、市教育委員会

○碑前祭 九月十二日午後〇時三十分より

千本浜歌碑前、百余名参加

喜志子未亡人、長男旅人、門人大悟法利雄、

門下の大悟法進、長谷川銀作、高島友二郎、

田中要吉、牧水会々長元市長倉宜一、高木

市長、石橋観光協会展長、他牧水愛好家ら

西高音楽部、幾山河……のコーラス、令孫聚

一君(十一歳)と長倉会長の令孫ふじ子ちゃん(七歳)の献花。喜志子未亡人の献酒、沼津バレー研究所生の「白鳥は悲しからずや……」が芝生の上にくり展げられ、参列者の感激を新たに意義ある記念式を閉じた。

○短歌大会 九月十二日午後 沼津市公会堂

講師 若山喜志子、長谷川銀作、大悟法利雄、

土岐善麿、小田切秀雄

入賞作品 不詳

○牧水二十七回忌記念講演会

九月十三日午後二時 市公会堂

○遺墨展 九月十一日〜十三日 会場

入場者十一日 二百七十名

十二日 三百三十八名

十三日 百九十二名

牧水ハガキ、啄木ハガキ、山脈、沼津歌人、

牧水歌集組写真などを売上げる。

―前略―第一回牧水祭について

此の催し最初の発起と発案は我々が昨年行つた「牧水を偲ぶ会」にあつたことはまぎれもない事実である。又、實際的に此の牧水祭を動かすテコ入れをした人は積さんである事も準備委員の間でも大きく認められている。然しながら之らの事を我々は手柄顔で言うことは避けよう。牧水祭を本当に心から受けとめるのは、他ならぬ市民全体だから。

(沼津歌人九月号 久田二郎後記より)

第二回 牧水祭

昭和三十年

○碑前祭 十月二十三日(日)午前 千本歌碑前

献酒、献花

○短歌大会 同日 午後一時三十分 市公会堂

講師 若山喜志子、大悟法利雄

詠草 百三十首 会費 五十円

出席者 長倉宜一会長、高木市長他六十余名

司会 積惟勝

朗詠・感謝の言葉 大悟法利雄

歌会批評司会 長谷川茂正、内田欣作、杉山

重義、山城襄

入賞作品

市長賞

みどり児は添寝の父の耳たばを持ちてぞ眠る

母逝きてより 堀越 きよ

市議会議長賞

嫁ぎゆく髪結はれつづいもうとの涙幾たびか

頬をぬらせり 山城 襄

市教育委員会賞

米兵を住まはず路地の板壁より青きペンキを

匂はする風 谷内 芳子

早稲田大学沼津校友會賞

今宵しきりに吾れにむち打つ思い深く花の影

ある卓へだて坐す 長谷川茂正

同前

ふるさとの母のたよりは無事とあれど筆のみ

だれに衰えをしる 蓬田八重子

青年會議所賞

これの世のひとりとの夫と頼りてはまつはり生

きし十年なりしが 芹沢 初子

特別賞(若山喜志子賞)

雨あとの月みづみづし居ながらに身は漂ひて

あるかと思ふ 井手けい子

今宵しきりに吾れにむち打つ思い深く花の影
ある車へだてて坐す
長谷川茂正

妻と子がまだ見ていると思いつつ勤めにいそ
ぐ秋晴れの道
久田 二郎

特別賞(大悟法利雄賞)

粘液をこぼせる百合のつき出せし雌しべの先
は灯に光りおり
神村 正史

老ひてなお児らと争ふこと多きはげしき母の
気性あはれむ
大井田メ子

○座談会「牧水を語る」同日午後六時 桃中軒

出席者 市の金子秘書課長、村上真、山田春
男氏ら、二十六名

会費 二百五十円

牧水の旧家や墓碑の保存の問題や若い人達
へ働きかける問題など出され広汎に不断の頭
脳運動がなされるべきであることが話し合われ
た。

今年には市当局も積極的に後援することとなり
広報活動を展開。沼津市「弘報」十月一日号

「牧水祭」の意義を市民に知らせる。

沼津市「弘報」十一月一日号「牧水祭」の結
果を報告する。

〈第二回牧水祭運営委員〉

長倉宜一、田中要吉、高島友次郎、村上真、

伊藤祐輔、長谷川茂正、芹沢初子、久田二郎、

杉山芳春、大井田隆、四方一潑、蓬田八重子、

杉山芳春、谷内芳子、佐々木青史、山城 襄、

葉山宣淳、杉山幸作、内田欣作、井手けい子、

積 惟勝、以上二十一名

二月 「沼津歌人」を「東海短歌」と改題

五月二十二日 東海短歌主催啄木祭
三月号より
講師 小田切秀雄、宮城謙一、精華高女にて

九月 牧水顕彰会発足
十月二十六日(夜) 土岐善麿先生に短歌を聴く

積、大西照洋、日出国、上田治史、久田二郎
十月二十九日三十日 啄木展

文化祭の一環として沼商で

〈牧水顕彰会規約〉

一、名称 本会は牧水顕彰会と称する

二、目的 本会は沼津にゆかり深い歌聖若山牧水
の顕彰を行い郷土の文化向上に資する

三、組織 本会はひろく市民有志(団体を含む)
による会員組織とする

四、会員 本会の趣旨に賛同し左会費を納入した
る者
普通会員年額壹百円、維持会員年額三
百円以上

五、役員 本会に次の役員を置く
会長一名、幹事若干名(会計を含む)

六、顧問 本会は顧問若干名を推戴し会長之を委
嘱する

七、役員の選任 会長は会員総会に於て選任する。
幹事は会員総会に於て会員中より選任
する。任期は三か年とする但し再選を
妨げない

八、役員職務 会長は本会を代表する。幹事は会
長の指示に従い本会の運営に当る

九、事業 本会は(一)の目的を達成する為左の
事業を行う

- ①牧水祭の開催
- ②講演会の開催
- ③

牧水文芸賞の設定 ④顕彰会の開催
⑤出版物の刊行 ⑥牧水史跡の保存

⑦其の他必要なる附帯事業
十、決算日 本会は毎年三月三十一日を以て決算
日とし会員総会は牧水祭開催の前月之
を開く。総会の議事は出席会員の過半
数で決する

十一、事務所 本会の主なる事務所を左の処に置く
沼津市教育委員会 以上

昭和三十一年九月十四日 牧水顕彰会創立事務所
沼津市千本緑町二ノ一三電話一四三五番

代表幹事 井手けい子

〈牧水顕彰会会員名簿〉(昭和三十年十月)

積 惟勝、河辺治一、大野虎雄、森田竹久、

高島友次郎、伊藤清重、大川八重子、渡辺顯

宗、田中要吉、中野 律、岡田吉信、佐々木

房子、長倉宜一、井上明信、谷内芳子、渡辺

八重子、井手けい子、石川みち、平山 要、

鹿島幸二郎、金子信男、大石敏子、蓬田八重

子、吉川佐波子、井関幸子、木村久子、竹沢

正夫、小林照子、長倉富子、大谷時夫、佐藤

英一、清水久明、稲玉むめ、近藤久次、渡辺

与四郎、高杉ふさ、星野重雄、青木脩致、森

祐治、西山はや、桜井 淑、小沢政徳、田中

旭、堀米喜代子、杉山金次郎、清水 昇、工

藤悟朗、中井こと、沢木仁子、伊藤祐輔、望

月庄次郎、池田たね、大関文羅、稲葉公平、

久田二郎、大塚たか、宇野秀吉、長谷川茂正

乙竹滋子、山田はな、(桃)桃中軒、島田新之助

田中うめ、佐野つる、大井田隆、池田 弘、

和田の里子、佐野宗平、林 輝彦、酒井越子
池田千枝、木村光顯、鈴木莊明、芹沢初子、
石川きみ、上田治史、鈴木良雄、佐々木青史
久仁 宏、杉山芳春、山田春男、太田古三朗
稲葉光子、柿島利男、田上 博、伊豆屋呉服
店、森永幸子、遠藤武雄、村上 真、長谷川
禎一、荒木久子、堀越きよ子、長谷川茂治、
一杉藤平、麻生悦子、野際東作、鈴木素介、
佐野 清、岡田春子、神山敦子、羽田寿恵子
野田あい子、加藤兵太郎、山本さき子、齋藤
美沙保、伊藤みち子、市川静江

第三回 牧水祭

昭和三十一年

○碑前祭 午前十一時三十分 千本歌碑前

献茶献酒、西高生の合唱、田中要吉氏朗詠

喜志子先生のお話

○短歌大会 十月十四日 正午 千本千松閣

詠草 百六十二首 参加 百二十名

司会 積惟勝

選者団 若山喜志子、伊藤祐輔、稲葉公平、

佐藤茂正

入賞作品

牧水賞 (若山喜志子選)

砂煙上げてよぎりしトラックがふりこぼし行

く砂利の音涼し

喜志子賞

答へねばならぬ立場に追ひつめられゆつくり

タバコに火をつけて居り

感情に溺れむとするをいましめて書かざりし

言葉一人秘めて持つ

森永 幸子

市長賞 (以下選者団選)

ミサの声洩るる街角を過ぎりつつよりどころ
なき今日の日の暮れ 葉山 宜淳

議長賞

語気荒く少年工を咎めきしむなしきよ水に掌
をひたし居り 上田 治史

教育長賞

背を向けて帯より紙幣抜く君の貧しき仕草店
先に見ぬ 牟礼 恭助

顕彰会賞

かたくなの吾が性故か転任して半歳ようやく
うとまれはじむ 須永 秀生

火取虫のなきがらあまた散りている事務室の
机今朝は拭きおり 後藤 寛子

第四回 牧水祭

昭和三十二年

○短歌大会 十月六日(日)正午 労働会館

舞踊出演 みどり会

講師 若山喜志子、長谷川銀作、大悟法利雄

朗詠 大悟法利雄 七十余名参加

大悟法利雄氏長谷川銀作両氏が故人の生前の

思い出や短歌のあり方などの講演をした。

入賞作品

牧水賞

稲架高く組みはじめたる若者がときにするど

き口笛吹けり

市長賞

叱りたる吾子の帰りを気にしつつか陽かげり

し部屋掃きて居り

市会議長賞

上田みち江

小林 弘光

戦火に死ねる娘ら遊ぶかとコスモスのゆるる
影にもときめき感ふ 大井田 隆

教育長賞

のしりを受けて感情揺れやまず西の茜の消
ゆるまで立つ 堀越 きよ

沼津新聞賞

喜びも怒りもあらわに示すなくいたわりあい
て共に老いたり 斎藤美沙保

黎明賞

階段の区切り区切りに富士の雲見つつ昇りて
廻診に行く 川口 和子

座談会「人間牧水を語る」

主催 沼津牧水顕彰会

時 昭和三十三年五月三十日

所 沼津 千成旅館

「沼津在住時代の思い出」

座談会出席者

若山喜志子 (牧水夫人)

石井 岬子 (牧水長女)

大悟法利雄 牧水門人

長倉 宜一 // 元市長

鈴木 俊一 牧水門人

井上 健一 浮影楼主人

菊地 敏治 牧水友人

芹沢 だい 湖月女将

芦川 勝郎 牧水と印刷関係で親交あり

田中 要吉 牧水門人

同席者

積惟勝(司会)、村上 真、大井田隆

ふだんの顕彰運動こそが、本当の有り方ではな

いか。沼津における人間としての牧水を知り、それを記録して人間牧水の姿を少しでも多くの人に知ってもらおうではないか。ということになり、たまたま決定版若山牧水全集が出るに当って、喜志子先生、大悟法先生が来沼されていたので、その機会をはずさずに、企画された。

後、九月に行われる三十年祭に間に合わせるために、このテープを記録、原稿、監修、冊子にまとめ頒価五十円で配布した。(速記 今林康夫氏) 小冊子 附・郷土を歌った牧水の歌

「人間牧水を語る 沼津在住時代の憶い出」

発行人 長倉宜一

編集人 積惟勝、井手けい子

印刷人(表紙) 芦川勝郎(本文) 久田二郎

発行日 昭和三十三年九月二十日

発行所 沼津市緑町(井手方) 牧水顕彰会

弘報ぬまつ 昭和三十三年九月一日(第一九四号)

市民の参加を

― 牧水三十年祭 ―

沼津市に最もゆかりの深い歌聖若山牧水が逝かれて満三十年に当たりますので、その偉業を偲び広く市民の文化的関心をたかめると共に、文化の向上をはかるため、牧水顕彰会・沼津市教育委員会共催で、次により「牧水三十年祭」を開催致しますので、市民のみなさん多数の御参加を御案内致します。

○会期 九月二十日(土)―二十一日(日)

○碑前祭―二十日(土)午後一時千本公園牧水歌碑前

○文芸講演会―二十日(土)午後六時市公会堂三階

講師及び演題

文芸評論家 古谷綱武：明治大正の文学をめぐ

歌人 若山喜志子：牧水の思い出

○遺墨展―二十日(土)二十一日(日)

午前九時～午後四時 未広町真楽寺

○静岡県短歌大会―二十一日(日)

午前十時から午後四時

市公会堂三階(教委事指導課)

第五回牧水祭

昭和三十三年

牧水没後三十年祭行事

共催 牧水顕彰会・沼津市教育委員会

後援 静岡県教育委員会・沼津市

○碑前祭 九月二十日 午後一時 千本歌碑前

塩谷市長竹内市議会議長を迎え、二百余名出席

牧水遺族門人の献酒、長倉春樹氏献花、田中

要吉氏の朗詠、若山喜志子夫人のあいさつ、

みどりの会の表現舞踊、大悟法利雄氏の朗詠、

花柳稔社中の創作舞踊、西高音楽部合唱、吏

友会の朗詠、女子高音楽部の逍遙歌、花柳瑞

寿美社中の舞踊が披露された。

牧水三十年祭記念静岡県短歌大会

○短歌大会 九月二十一日(日)午前十時～午後四時

市公会堂

講師 木俣 修、若山喜志子

選者 若山喜志子、木俣修、伊藤祐輔、稲葉

公平、大岡博、積惟勝、高原博、前田

福太郎、森伊左夫

表彰 静岡県知事賞、牧水賞、静岡県教育長

賞、沼津市長賞、沼津市会議長賞、沼

津市教育長賞、各新聞社賞、静岡放送

局賞、その他

主催 牧水顕彰会・沼津市教育委員会

後援 静岡県教育委員会 沼津市

○短歌大会 入賞作品

第一位

まだ我に倅せありと病める掌に染みる紫紺の

糠漬しほる

勝亦 悦子

第二位

背に針を刺されて乾く昆虫のかたえに吾子ら

屋を眠りぬ

上田 治史

第三位

嵐過ぎてあらはに青き柿の実のかゞやきに

つゞけし七子の日

大井田 隆

第四位

雲湧きて秋来る海の潮の照り展くるものをひ

そかに恃む

太田利一郎

第五位

音なくて貼絵の如き遠花火見つつ乏しき会話

続ける

上田みち江

第六位

用意せし言葉は逐に言はず来て独り渡船の綱

たぐりを取り

第七位

妥協せぬわれをばげしくなじる声逃れきし海

に船遠ざかる

杉山 久子

第八位

山畑より帰る我が家の窓灯り炊ぎの子等の影

のうごける

谷内 芳子

第九位

一つの玩具奪いあいつつ幼らは狭き借家に育

ちゆくべし

山本あやめ

第十位

アスファルトの黝々溶ける炎天の道再発の危
惧いだきつゝゆく
渡辺 靖之

牧水賞 (作品不詳)

麻生 鋭

沼教指第八五二号 昭和三十三年八月五日

沼津市教育委員 委嘱

沼津市教育長 工藤 悟朗

牧水祭委員長 長倉 宜一

井手けい子、伊藤祐輔、大井田隆、芹沢初

子、久田二郎、上田治史、長谷川茂正、積

惟勝、麻生 鋭、金子信男、村上 真、蓬

田八重子、山田春男、田中 旭、森田幸之、

二橋正夫、長倉宜一、高島友次郎、田中要

吉、杉山善四郎、杉山幸作、山田秋太郎、

勝又理作、鈴木義弘

○講演会 九月二十日午後六時 市公会堂

明治大正の文学 古谷綱武

牧水の思い出 若山喜志子

○遺墨展 九月二十日—二十一日 真菜寺

牧水三十年祭県下短歌大会に協力した人々

久田二郎、積 惟勝、伊藤祐輔、長谷川茂正、

川口和子、羽田寿恵、高島尚子、井口真佐子、

酒井越子、岩崎竜明、上田治史、須永秀生、佐

杉山重義、杉山芳春、四方一弥、須永秀生、佐

野つる、山田登世子、安田美穂子、芹沢初子、

山本さき子、堀内裕子、斎藤みさほ、平野彦六、

大井田隆、前田みのる、谷内芳子、後藤寛子、

井手けい子、大嶽さち、林田寿江

第六回牧水祭

昭和三十四年

共催 牧水顕彰会沼津市教育委員会

○碑前祭 九月二十日(日)午前十時 千本歌碑前

牧水顕彰会長の長倉元市長、田中市議長

工藤教育会長を迎えて盛会 八十名参加

献花 長倉春樹、献酒 遺族門人

西高音楽部合唱、指揮松下隆二

○牧水展 九月十九日・二十日 温古堂

(一)遺墨色紙短冊半折書簡遺品

(二)牧水に因む写真の展示 円沢紅嶺作

○短歌大会 九月二十日(日)午後一時 千本臨海寮

詠草 百六首 互選と喜志子選

入賞作品

若山賞

決をとる委員長の声重々し心さだまらぬまま

街燈ともる

竹下 勝

息子の言う言葉はすでに予期すれど茶を呑み

ほしておもむろに聞く 大川やえの

山裾をめぐり延びゆく単線軌道入陽にかがよ

うひとつとこころ見ゆ 芦川 源

互選賞一位

叱られて涙ぐみつつ仰ぎ居しが少女はインコ

の籠をゆり始む 大西 照洋

第七回牧水祭

昭和三十五年

牧水三十三回忌

共催 牧水顕彰会沼津教育委員会

○碑前祭 九月十八日午前 香貫山の新しい歌碑

の前

○短歌大会 九月十八日午後一時 沼津霊山寺

詠草 百三十九首 出席 百三十名

喜志子門弟及び片山静枝他選者団

入賞作品

牧水賞(若山喜志子選)

北へ走る雲より夏の陽が洩れて不意に香貫の

山が明るし 上田みち江

喜志子賞(若山喜志子選)

砂ほこり吹きつけてくる南風に夜をまた日向

のにおいがこもる 井沢 美智

病み呆けて尚ひそかなる夢を持つ我に優しき

孤児の幾人 大西 照洋

教育長賞(選者団選)

父祖の地もやがて湖底に沈むべし雇われて今

日も岩肌を裂く 藤江 廉平

教育委員会賞(同)

みづみづと夜の灯にゴムの葉光りゐて茶房ひ

そかに合ふ掌が熱し 稲本とし子

暫くは子産むなという義母の意見夜なべの小

さき背に憎めず 佐野 尋子

(敬称略)

『牧水みなかみ紀行』を往く

大林 永一

いう信州との境に近い白樺美術館に着く。ここが今日最初に見学する所で、清里芸術村の施設の一つ。武者小路実篤を中心とした白樺派の作家達が建設しようとして、その夢を果たせなかった「幻の美術館」でもある。文芸雑誌「白樺」に拠った作家は志賀直哉、有島

沼津牧水会主催の旅行会に参加した五十人近い人達を乗せたバスは、十九日朝七時に沼津を発つて、八時にはもう朝霧高原にさしかかっていた。この四、五日不順な天候が続いて、旅行も危ぶまれていたのに快風秋晴れの暖かい好天気恵まれて、大富士を右手に見ながら、なんとなくこれからの旅の楽しさが予感され、心は自と弾んでくるのである。

見渡す限りの富士山麓の芒原の中を、バスは一路甲州の精進湖・本栖湖を目ざしてひたすらに走る。

○芒、芒、芒の根原（ねはら）を降りゆきて眼下（まなした）に遠き秋の湖（本栖湖）

右左口トンネルを出ると道は一気に七曲がりの坂にかかる。中禅寺のいろは坂にも似て、天城山の山道の比ではない。行く手には八ヶ岳の遠望の下、甲府、韭崎が秋光の佇いを湛えて息づいている。秋風の渡る白い河原を見せる笛吹川をバスは渡り、快適に甲州路を北へ向かって走る。長坂ICから程近い清里と

武郎・生馬、里見弴、長与善郎、木下利玄等で、明治末年から大正十二年頃までの大正文壇を支配した日本近代文学の一派を白樺派というのだが、自然主義に抗し、人道主義、理想主義を標榜し、自然主義退潮後の文壇に活力を賦与して支えたのである。美術にも関心を持ち、印象派の紹介の他、中川一政、岸田劉生、梅原竜三郎等とも親交を重ねた。

この建物は白樺派の人々を敬愛し、個人的にも親交のあった吉井長三という人が実現したもので、「ゆくゆくは美術館を機縁として何か人類の平和と愛と喜びと理解と友愛の運動を日本にも起したいと思ふ」という武者小路実篤の精神が、この美術館の根底に流れている——と案内書にもあるが、私はここで梅原竜三郎の「きじ」「ノートルダム寺院」の絵のすばらしさに感動して、暫く佇立したままだった。岸田劉生や中川一政、リーチに会えただけでも来てよかったと思った。

いいものを観たという歓喜にも似た幸福感で、ワインをゆつ

くりと味わい、軽いフランス料理を愉しんで昼食は終わり、記念の写真を夫々が撮った。建物の前庭の八十本程の白樺の林と若い女の塑像に別れを告げて、いよいよこれから千曲川、小諸を左手に見て信州軽井沢へとバスは向かう。

真夏でも二十三度を超えないという軽井沢は私には初めてだが、明治中期に英国の宣教師A・ショーにより、すぐれた避暑地であることが見い出され、その後大正年間に日本の文士達も大勢来るようになってから次第に発展するようになったというだけあって、浅間山の厚い火山灰に蓋われた広大な高原の中に、落葉林をめぐらせたその風光は、どこかヨーロッパ的なところがある。小さな池の傍らにある高原文庫は、かつてのモダンな先人達の精神が息づく文化拠点で、年を経た今日見ても、その時代の精神が息づいているようである。高輪美術館は心身の疲労した高齢の人達には、あまりに斬新で、その審美眼にはついていけないようであった。

軽井沢を後にしたバスは前景にずっと見えていた浅間山の南麓を東側に沿って信州路を上州へと走って行く。

長野、群馬両県境にまたがる海拔二千五百四十二メートルの浅間山は、おだやかな秋の日に白煙を上げて見える。三重式活火山で、外輪山に囲まれた姿は、天明三年（一七八三）に大噴火して、多数の死者を出したとは思えない程、ゆったりとして静かであ

る。秋の白雲が山頂にかけて大きな影を落として、それがじつと少しも動かない。その濃い影の中に白煙がうすうすと見える。

○浅間嶺に立つ煙見ゆ秋雲の動かぬ影にまぎるるなくに

（浅間山）

硫黄臭の中を、夕方六時頃草津温泉の一井旅館に着く。ここは約六十五年前、牧水が泊まった宿で、今夜はここに一泊の予定である。

明くる二十日、宿を朝八時半出発。今日も快晴。雲一つ無い秋天である。小雨部落、花敷温泉を経て、紅葉のさかりの暮坂峠に到着したのは十時半頃。すでに草津町、中之条町の人々が祭りの下準備に忙しく立ち働いている。中年の婦人の方が多い。

この暮坂峠は、昔は一本の細い山路であった。心身の疲労困憊の果て、大正九年八月東京から沼津へ転居してきた牧水は、生活も漸く安定し、精神も肉体も充実した大正十一年十月、念願の「みなかみ紀行」に出發している。十四日早朝に沼津を發つて、十六日に小諸を見、浅間山麓の星野温泉泊、十七日に軽井沢を経て、草津には十八日夜泊まっている。十九日に宿泊した花敷温泉を出て、二十日の昼頃暮坂峠を通つて、沢渡四万（さわたりしま）を経て中之条渋川に行き、二十一日は沼田に宿泊。これから約十日間、月夜野、猿ヶ京、法師温泉、笹の湯、湯宿、白根温泉、日光湯元温泉、戦場ヶ原、中禅寺湖、華厳の滝を見、

日光の友人宅に二泊の後、宇都宮へ出て、沼津へ帰着したのは十一月五日であった。

何も取り立てて、特徴のない地図にも無い北国の山の中の一本の峠道暮坂峠を牧水が通り過ぎてから後の三十年、地元の有志がこの峠に手を加えて、詩碑を建て、「牧水まつり」を始めたのは、沼津千本浜の「牧水碑前祭」に遅れる事四年今年が三十一回祭である。その碑は磨きあげられた黒御影の横四・五尺、縦三尺位の一枚石で「枯野の詩」は活字体で刻まれている。その当時の牧水の一尺位の旅姿の像が、この詩碑の右肩に立つて、暮坂峠をじっと眺め下ろしている。碑前に沼津牧水会から持参した銘酒「牧水」が供えられて、式典は十一時頃から始まった。型の如くの祝詞やお礼の言葉でなごやかなうちに終わった。海抜千八十六尺の峠である事を意識しない暖かさで、風は無く、逝く秋の山の日射しと高い蒼穹と流るる秋雲が心に残るばかりであった。

この碑の前で、式に参列した旅人ご夫妻と写真を撮り、三日の沼津の碑前祭での再会を約した。お互いの年齢から考えて、おそらく暮坂峠の邂逅も、これが最初の最後になるのではないかと転た感慨を共にしたのであった。大正二年に生まれた旅人さんとは沼中で五年生と一年生の関係であった。父牧水がみなかみの旅行の頃は十歳、岬さんは七歳、真木子さんは五歳、富

士人さんは二歳で、牧水はやがて不惑に近い三十八歳であった。この五年後の昭和三年九月十七日に四十四歳で沼津で没しているのだから、旅人さんは旅から帰ってくる二十日ぶりの父を待ち侘びた事だろうと思う。

牧水としては珍しい詩の「枯野の旅」を次に掲げよう。

乾きたる

落葉の中に栗の実を

湿りたる朽葉が下に橡の実を

とりどりに

拾ふともなく拾いもちて

今日も山路を越えて来ぬ

長かりし今日の山路

樂しかりし今日の山路

残りたる紅葉は照りて

餌に餓うる鷹もぞ啼きし

上野（かみつけ）の草津の湯より

沢渡（さわたり）の湯に越ゆる路

名も寂し暮坂峠

七日もの間、浅間山麓の枯野ばかりをひとり歩いて来た牧水は、暮坂という何かロマンを思わせる寂しい名の峠路をほつとすする気持ちで通り抜けたことだろう。ここには遠く枯野を来て、

暮坂峠のきのこ汁



暮坂峠・牧水祭

紅葉の山路をすたすたと通り抜けてゆく旅人牧水の感慨が、今も感じられる詩である。

○秋深き暮坂峠にはるばるとわれ来て佇てりさびしくもある
か

○秋もやや深まる山の真昼間をかそけく行きし人をおもへり
○年ふりて会ひたる友のあたたかき握手わすれず秋の山路に
温かいなめこ汁と冷酒を振る舞われて帰路についたのは三時
前だった。東名高速が修理中のため、伊香保、練馬の予定を、
山中湖、御殿場に変更、それも駄目なので、往路と同一の道を
帰る事になった。お陰で昨日観られなかった浅間山の奇景「鬼
押しし岩」をゆっくり観覧する隙があったのは何よりだった。
ここで車椅子を押して、六十三歳の母に景色を説明している三
十歳位の息子を見て、奇岩のすさまじい風景の中に、心あたた
まる人間像を見て、私は目頭を熱くした。

とつぷりと暗くなつた朝霧高原を経て、華麗な灯の富士の街
中を抜け、沼津へ帰着、駅北と駅南で一同を降ろして、無事に
今回の旅行を終了したのが八時半頃であった。牧水会理事とし
ての責任完了は勿論ながら、牧水記念館の上田副館長や館員の
人々の幹旋尽力は並々ならぬものがあつたらうと改めて感謝の
意を捧げるものである。

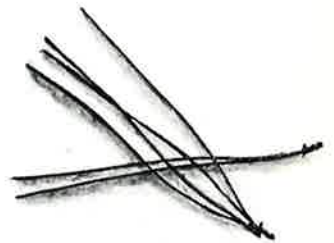
(社団法人沼津牧水会理事)

第35回 沼津牧水祭・碑前祭

10月30日(日) 午前11:00～
千本松原 幾山河歌碑前

昭和六十三年十月三十日、恒例の碑前祭・芝酒盛が、およそ五百人の参加のもとで盛大におこなわれた。若山旅人先生の献花献酒から始まり、沼津市教育長のお祝いの言葉等の式のと、混声合唱・牧水を唄う仲間たちの牧水の歌の合唱や沼津太鼓そして、花柳稔さんの舞踊とにぎやかに繰りひろげられ、好天にも恵まれてさわやかな一日であった。今年の碑前祭の特色は、自前のおでん・ひらきのサービスを取止めて、桃中軒の屋台出張サービスにまかせたことであった。前日からのおでんの仕込み、当日のおでん作り、ひらき焼きといった労力奉仕を続けるには担当者の相当の努力が必要な訳だが、遊びと割切つてはいても次第に年をとって、いつまでも続くものではないという判断もあり、また衛生面の要求もあつて思い切つて改革することにしたのである。

手もちぶさたで感じが出ないという声もあつたが、それだけそれぞれが、芝酒盛をゆつくり楽しめたとおもっている。何より後片付けの手間がなかったのが楽であった。やきとり・やきそばが好評であった。コーヒー館のコーヒーもおいしかったし東海流のお茶の味も最高であった。



第35回 沼津牧水祭・短歌大会

10月~~11~~¹²日(日) 午前10:00~
沼津軒7階ホール

第35回 沼津牧水祭短歌大会



牧水祭短歌大会記

馬田 曄子

第三十五回牧水祭短歌大会は、十月九日、沼津駅前沼津軒に於て開催された。今年初めての試みとして、一人二首までの応募を認めたこと
もあつて、出詠四百七十七首(昨年は四百四首)の多数にのほり、出席
者二百二十名に及ぶ盛会となつた。

歌会は県歌壇より、昨年と同じく高嶋健一、寺田武、藤岡武雄、藤田三
郎、山田震太郎の五氏を迎え指導を仰いだ。まず須永秀生氏の司会により、
上田治史氏の選者紹介から始まり、昨年来の方式によつて進められた。

各講師の持ち時間約二十五分、はじめに寺田氏は、師事された「国民
文学」の松村英一の「歌は文芸とは思つていない。もつともつと切実な
もの、もつと大事なものと考える」との説を引き、自身の短歌に対する
姿勢について語られた。

寺田氏選1へ美術館のドアに小さく映りをり車椅子の上のわが老い
し母、「小さく」は言わぬ方がよい。全体的には説明に終わらず「…映
りをり」と小休止したところがよい。2へ在りありて来し三光鳥の縫ひ
ぐるみ子の病名を聲にして言ひたり、子の難病、それもあまり口にした
くない病名、或いはこの子は亡くなってしまつてゐるのかも思わせる
切実さがある。3へ五十年の父の法要しあはせの近づく如く母の待ちあ
るゝ、母のあわれさとやはり幸せの感じが出てゐる。「法要」の下に「を」
を入れるかどうか、やはり一呼吸おいて助詞は省いた方がよいだろう。

藤岡氏は茂吉の唱えた「自分と対象とが一つになる…」はじめて新し
いものに出会つたような気がする、新鮮なおどろき。そのはじめて出会
つたような感動をうたえ」というへ実相観入」の説を引いて、これは常
に感動を新しくする所謂「新しい発見」。これは同時に読者を感動させる
ものとなる。自分の、作者なりの発見が大切と結ばれた。

藤岡氏選 1 へ手話交す少年少女の瞳澄みこころ幼き相聞ならむ、「瞳澄み」が相聞を表現している。「少年少女」では複数となるから、少年と少女と「と」を入れることで対象を個人に限定したい。2 へ蠟燭の炎動けば仏壇の観音像の表情うごく、「動けば」とコトワリを言わない方がよかつたかもしれない。3 へ旅に誘ふことも無くなりし老い母と湯けむりの里のテレビ見てる、テレビに映る湯けむりを老いた母と見ている淋しさが伝わるが、やや説明的。上下句を逆にしたらどうか。

藤田氏。作品の多様化につれ選歌の価値判断もきわめて難しいと前置きして、講評に入った。1 へ朝あさを真白き木槿の咲きつげど母逝きしより刻止まりたり、「一日花」と称ばれる木槿を詠んだ他の作品にも触れて、「刻止りたり」はこの作者の発見ではないかもしれないが、思いがこめられている、と評価した。2 へ末期癌の義姉が無表情に口を開け入歯の具合などを話すも、内容に圧倒される。義理の姉とことわったところに、作者の心理の微妙な翳も窺えよう。「末期癌」は「癌病む」で充分ではないか。3 へアイバンク勧めしことが藪蛇か娘は獣体を言ひいでひかず、目覚めた若い正義感に、少し狼狽している母親。今日的な素材と言える。「藪蛇」は俗語だろうが、ユーモラスな味わいを加えた。

なお、へいぬぶなの林の斑雪陽にうるみ径おのづから沢によりゆくを品位ある自然詠として挙げ、更に「ブラック展」で眼に止めた「芸術で大切なのはただひとつ、人の説明できないものがそれである」という言葉を引き、私はどちらかと言えれば説明できる歌を採る傾きがあるようだと結んで、午前の部の講評を終えた。

午後部は、山田氏が短歌との関わりについて述べ、一首の中のへてにをはへにつき厳しく教えられたが、時が経つにつれ、歌のなかでへてにをはへは一つの世界ではあるがそれだけではない。歌も時代と共に生きてこそと思うに至ったと説いた。

山田氏選 1 へたえしのお恋こそ花や紅葉やといいたる後のあきの夕

暮、古歌を踏まえての斬新な感覚と個性を評価。2 へ週末を銀座の香りと独り身の匂い織りませ夫帰り来る、俗すれすれのところだが、爽やかさがあると支持。3 へ五十年の父の法要、ここに詠まれた「母」の可愛らしさに搏たれる、と評した。

最後に高嶋氏は、1 へ母そはの余生のための生ならずとプラハに棲む息子のみじかき便り、母の何がしかの働きかけのあったことを想わせる子の返信。諦めが結句の調べに出ている。かなしみを諦める気持ちがこの歌を重いものとしている。モノクロの世界。2 へ逢ひたしとかけし電話に忙しさを言ひて子の声あかるく切れぬ、社会人としての息子の母親への労りもうかがえ、作者の心も明るい。現代の家族のモノクロでもないし全くカラーでもない状況を詠んだ。現代の母親像を伝えている。3 へ五十年の父の法要、法要の下に「を」を入れた方がこの意向もあつたが、下の句が重くなると思う。

なお、へガラスに文字書かれた窓のすきまよりパズルのような街を見ているは、上位三首に入れようと思つた歌、この感覚は若々しい。直喩と口語調の語り口、ライトヴァース。やわらかさ、たのしさもあり、いい絵がある。十年前だと出て来なかつた歌と評価ののち、作歌全般への進言として、訴えの強化と自分の歌の年齢を中心として動いてゆることが大事であると結ばれた。

次に互選高ポイントの数首について、各講師からの適切な寸評があつた後、大詰めの牧水賞選考会の運びとなつた。まず司会の須永氏の、作品に対する評価が、分かれるのは現在の歌壇一般の傾向で、各氏が一位に推した作品に限ってもそれは言えるとの発言があり、引続き高嶋氏の、現代の短歌の幅の広さは、そのまま評価の幅の広さでもある。歌をよく見るためには、私は声にだしてみる、との教示を得たのち、昨年来の方式に拠つて満場の参加者の目の前で、さきに挙げた各選者選出の三位までの作品を中心に、密度の濃い検討が展開された。懇切な講評にもっといつまでも聞いていたい雰囲気であつた。進行役の上田氏から発言があり、

作品全体を見渡すに、そのほとんどが実人生を大事にした作品。何をうたうかが問題であり、想像力を働かせてうたうこと。そして今回の特徴として、自然詠が影をひそめてしまっている、などの有益な指摘があった。いよいよ牧水賞の発表がある。第一位の作品について高嶋氏よりコメントがあり、この歌から「しあはせの…」を取ってしまったら、一首はガタガタになってしまう。この歌に限らず、歌というものは少しぐらい「牙」があつてよい。他との比較においての一位とする、として講評を総括された。

牧水賞

一位

五十年の父の法要しあはせの近づく如く母の待ちある 齊藤千鶴子

二位

逢ひたしとかけし電話に忙しさを言ひて子の声あかるく切れぬ 加藤 江美

三位

美術館のドアに小さく映りをり車椅子の上のわが老いし母 岡野谷千里

同候補作品作者（順不同）

手話交す少年少女の瞳澄み…

在りありて来し三光鳥の縫ひ…

母そはの余生のための生ならず…

蠟燭の炎動けば仏壇の観音像の…

朝あさを真白き木槿の咲き…

末期癌の義姉が無表情に口を開け…

たえしのぶ恋こそ花や紅葉や…

旅に誘ふことも無くなりし…

板垣 勝子

渡辺たつ子

小野田幸子

大林千代子

真田 喜和

西山 幸枝

柚木 新

山内 美緒

ガラスに文字書かれた窓のすきまより…
週末を銀座の香りと独り身…

旋盤の甲高き音に安らぎいるわれいつよりか職工の妻

亡き夫の懸けし木橋を渡り来て土かぐはしき竹の子を掘る

物干竿の高くなりきとひとりごち爪先立てて濯ぎ物ほす

台湾沖を漂よひ命得し夫のいくさ話も年ごとに減る

夫の死と引き替へに来たる…

互選上位入賞歌

一位 頬紅はこれが最後と持ちゐるしが八十路永らへまた一つ買ふ 横江 ふみ

二位 よそゆきの化粧落して地下足袋を履けば農婦の顔となりゆく 前田百合子

三位 夫の死と引き替へに来たるこの自由胸の底ひに木枯の鳴る 橋口みち子

四位 子を閉じて我も泣きたる想ひ出の蔵もあしたは毀ざると云ふ 秋元 悦子

五位 十年（ととせ）経て帰り来し息（こ）は母われの知らざる面をし 久保美代子

六位 母の五指のかたち残れる糠みそを逝きたるのちの厨に見たり 菅沼 雅子

七位 物多く言うことのなく棲む日日や夫がするどく蠅を打ちたり 前田百合子

八位 護符のごと夫なきのちを秘め持てば軍事郵便古りて匂へる 堀内 裕子

九位 皿の上のゼリーふるふる震はせて少女等の笑ひ限りもあらぬ 浦田 光江

近藤ゆみ子

沢田 角江

石田 宮子

上野みつ子

為貝 多加

太田かづ子

橋口みち子

文学講演会



講演

鈴木秋灯氏

「師・牧水を語る」

十二月三日(土)



開館一周年記念講演

小川国夫氏

「梶井基次郎と伊豆」

十一月五日(土)

放談

高嶋健一対上田治史

「近代短歌のれい明期の歌人たち」

六月二十二日(水) 八月二十四日(水)

「本当にその歌の中身のすばらしいものを引き出した上で、いい歌、悪い歌と言っているのかどうかということね。私はよく歌会のあるときに、すぐ批評を始めると、批評の前にすこし鑑賞をしてはどうですかと。即ち、こう受取ったということを前提として、この歌はいいとか悪いとかを言わないと通らないと。間違つて受け取っていると。読者より作者の方が、深い場合がありますからね。そう提案したことがあるんですよ。」

※具体的な作品をおしての話は多岐にわたって、現代短歌を考えるには、格好の会であった。

講演

中尾 勇氏

「ふるさとの若山牧水」

一月二十五日(水)

牧水と北原白秋との交友は、明治三十七年四月に牧水が日向を、白秋が筑後を出て、早稲田大学英文科に入学、教室でたまたま席を前後して座つたときから始まった。白秋はその頃号を射水といい、もう一人の仲間とともに「早稲田の三水」と称して、肩で風を切った時代がある。

石川啄木は牧水の最も良きライバルであった。付き合った期間は短かったが、不遇な啄木の死の際に、ただ一人枕元に付き添ったのは牧水だった。牧水は友人の死を「病みそめて今年も春は桜咲きながめつつ君の死にゆきにけり」と歌った。

短歌会

牧水記念館短歌会

七月二十三日(出) 九月二十四日(出)

助言者に静岡の女流歌人の山口静子、幸田麗子、入野早代子の三氏を迎えて二回に渡って行われた。参加者は両回ともおよそ三十余人で、ゆつくり一首一首を批評鑑賞できて楽



しい会であった。県内のそれぞれの結社の中核として活動されている三氏の発想の違いが一首のとらえ方の差になり、その差を説明することで、現代の短歌のありようを突詰めることも出来るようかと考えたが、その面では、物足りないものがあつたかも知れない。作品の質にかかわってくる問題で、改めて、作歌への厳しい姿勢が要求されたようにも思っている。

雑の歌会

三月五日(出)

雑の歌会の講師はやはり女性のほうがいいというところで、「未来」の阿木津英さんをお呼びすることになった。異色俊鋭の歌人とし著名な方だけに会場の狭さもあつて、案内は極力押えてくださったにもかかわらず、予定の五十人を大幅にオーバーして、寄せられた歌の数が八十二首。当日出席を前提としての応募であるだけに和室二室では無理ではないかと一時は別の会場にしようかとも考えたのである。ロビーは郷土の画家達による「絵画で見る牧水の歌」のイベントを開催中で使用できないし、そのイベントも見えてほしかったので予定通り強行することにした。幸い参加者は七十五名で入口まで溢れたが一堂に集まっての会として開くことが出来た。

会は介添え役に玉城徹先生を迎えて盛会であった。時々「沼津の人達の歌」というひとまとめにまとめた批評がでて、地方で歌を作ることの悲哀を感じないこともなかったが八十二首をはじめから丁寧な批評されて、短歌とは何かを分らせ



てくれた会であった。リアリズムを主体とする考え方で通されて、その意味から言うところの詩的表現への言及を期待した向きには予想外であったかも知れない。この雑の歌会は今年度も女流歌人をお迎えして開催したいと考えている。

【写真】上 山口静子、幸田麗子、入野早代子の

三氏を迎えてなごやかに開催

下 玉城 徹氏と阿木津英氏を迎えて、

満席入口にもあふれ盛会裡に

サロン音楽の夕べ

昨年一年間における
活動の一コマ



8月13日(土) 19:00

イタリアギター室内楽の夕べ

6月9日(木) 19:00

スペイン歌曲の夕べ



9月25日(日) 18:30

マタイ研究会メンバーによる

弦楽四重奏と歌曲の夕べ

11月26日(土) 19:00

開館1周年記念

花島雅子ソプラノアルバム



12月9日(金) 19:00

つのだたかしを迎えて

リュート独奏ダウラント歌曲

絵で見る牧水短歌の世界

第一回特別企画展

平成元年二月十四日より三月七日まで
 牧水記念館ラウンジ



相沢常樹 「錨」 油彩

晴れわたる空より樹より散りきたるあふ落葉のさまのたのしさ 「別離」
 おもひやるかのうす背き映のおくにわれのうまれし朝のさびしさ 「路上」
 雪ふればちらちらとさびしさがなまたたかく身をそそるかな 「路上」



青木洋子 「無題」 墨・和紙・キャンパス

人の世の底をながるかなしみか汝とむかへばひそかには燃ゆ 「捕蓮」
 秋に入る空をほたるのゆくことくさびしやひとの忘れぬかな 「路上」
 われは酒のごとく闇を愛す、一切の解決と悲哀とを其処に影らむと願ふ 「捕蓮」



吾妻正弘 「静夜」 版画

起きてゐて身にわるけむとおもひつつこの静夜をいねがてぬかも 「渓谷集」
 よりそひて坐るガラス戸をりに風の鳴れども沖辺晴れたり 「渓谷集」
 炬ちかく遠ぐる夜汽車のとどろきのなつかしきかもいまの寝覚に 「くろ上」



竹井 連 「みつたま」 油彩

遠い麓に杉の木がまばらに立って居る、人の生にある悲哀のやうに「みなかみ」
 懐けてあふげば瑠璃の高ぞらにみどりの雨を見るまぼろしよ 「捕蓮」
 わがころ碧玉となり日の下に曇りも帯びず歎く時あり 「路上」



長沢脩而 「垂の榊」 バステル画

大枝を投擲にせる葉をしげみ落りてぞ咲く榊の椿は 「くろ上」
 片側はくらきに向ひ片側の葉のつばきは灯をあびて照る 「くろ上」
 見に来よと言ひやりかねつけふもただ独り見てをり椿の花を 「黒松」



成瀬 憲 「富士」 油彩

たづね来て泊れる人をゆり起す夏めづらしき今朝の富士見よ 「山桜の歌」
 寄り来りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山辺に 「山桜の歌」
 うねり寄るうねりは此処にまなかひに真澄みたかまりうねりよるかも 「黒松」

絵で見る牧水短歌の世界



青島淑雄 「東尋坊素描」 日本画

はすかひに日のなりゆけばそぎ立てる断崖の面は愁ふるがごと 「深谷集」
 真白波つぎつぎ立ちてひもすがら断えねば岩の淋しくを居る 「深谷集」
 白鳥はかなしからずや海の青そらのあをにもそまずただよふ 「別離」



井本恵子 「たんぼぼ」 日本画

多摩川の砂にたんぼぼ咲くころはわれにもおもふ人のあれかし 「路上」
 ウキスキキヒそかに持ちて来へかりし春あさきこの積草の原 「砂丘」
 つかれはてすわれる圃のもとをすぎ春あさき日の小川流るる 「秋風の歌」



小松浩代 「花」 水彩

わが窓の終りゆくころとりに初なつたの花の咲きいでにけり 「別離」
 とりみだし哀しみさげび嘆息すああ天地に夏の来れる 「別離」
 枯れしち最もあはれ深かるは何化ならむなつかしきかな 「独り歌へる」



中村王哉 「駿河路」 日本画

よき日和つづくこのころ遠空の高嶺の深雪かがやけるかも 「黒松」
 おぼろおぼろ海の風ける日海こえてかなしきそらに白富七の見ゆ 「独り歌へる」
 駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山 「くろ上」



袴田省三 「松原と富士」 水彩

まがなしき春の霞に富士が嶺の峰なる雪はいよよかがやく 「山桜の歌」
 日に三度来り来飽かぬ松原の松のすがたの静かなるかも 「黒松」
 止むべしとただにはおもへ杯に匂へるこれのまへにすべなし 「黒松」



猿黙庵子 「沼津の海」 日本画

わがゆくやかがやく砂の白砂の浜の長手にかきろひの燃ゆ 「山桜の歌」
 向つ岸駿河の国の長浜に浪の立てれば間近くし見ゆ 「黒松」
 冬寂し愛鷹山のうへに響え雪ゆたかなる富士の高山 「黒松」

絵で見る牧水短歌の世界



高木 俱 「砂丘テトラポットのある」 油彩

ただひとり離れて島に居る(とまき)ころ斬くうかぬゆふべ 「路上」
 海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり 「路上」
 海に來ぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづくにも捨てどころなく「振り歌へる」



杉山英雄 「生きたい」 版画

つまといひ夫とよぶ恋の落人のかくれ棲む家に落葉ちるなり 「船遺」
 古寺の木立のなかの離れ家に棲みて夜ごとに君を待ちにき 「別離」
 かなしげに足は降るなり恋ふる子等こよひはじめて添寝しにける 「別離」



志賀旦山 「網走の雨」 日本画

さやさやと音たてて来し雨脚のいま降りかかる窓さきの木に 「山桜の秋」
 ひとつらに並び流るよ網走のその川口の真白き鳩は 「出松」
 あをあをと雲にかけれる彼の岬このみさきいざとびて渡らむ 「死か云雨か」



山下 博 「夜の松林」 油彩

わけ入りて静かに居れば海底のしづけさを持ちてこの森は居る 「路上」
 黒松の老木のうれそ静かなる風吹けば吹き雨ふれば降り 「黒松」
 光無きいのちの在りてあめつちに生くとふことのいかに寂しき 「路上」



八木敏裕 「卓上花」 油彩

怨まむにあまりけだかき実みなれや百合による子のまだ恋知らぬ 「船遺」
 わが歌は夏にふさへり行くさの大野に百合の香をひめたらむ 「船遺」
 気に入った塚でもあらば、塚のかたちに、はやなりなまし、わがこころ 「みなかみ」



武藤セイコ 「初秋」 油彩

思ひ倦めば仕もねむりて夢を見きなつかしかりき海辺の木立 「別離」
 ここよりは海も見えざる砂山のかげの日向にものをおもひぬ 「振り歌へる」
 君かりにかのわたつみに思はれて言ひよられなばいかにしたまふ 「海の声」

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹
 〈副理事長〉 大河原二郎 佐藤茂正
 〈理事〉 大林栄一 杉山光男 上田治史
 河本與司 浅井 治 保坂輝夫
 寺田桂子 川口和子 青木朝子
 〈監事〉 四方一弥 八十濱俊一 田中和男

後記

「牧水会の足跡」をまとめるに当り資料の提供やアドバースとして励ましの言葉を頂きました市立駿河図書館様 若山旅人様 井手けい子様 積惟勝様 田中旭様 伊藤祐輔様 大林栄一様 佐藤茂正様 久田二郎様 上田治史様 前田みのる様 芹沢初子様 林牧水会会長の皆様に誌上にてお礼申し上げます。

○参考資料「沼津歌人」「東海短歌」沼津朝日新聞 静岡新聞 県歌人協会会報 牧水会会報 人間牧水を語る座談会記録他

青木 朝子

先ごろ春の一時を記念館から港公園、さらに内港から港大橋そして、蛇松緑道を乗運寺まで歩いてみました。蛇松緑道はいいですね。沿道の方々の努力もあるのでしょう。四季こもごもの花が咲きつづけ、いつ歩いても快い充実感を抱かせてくれます。

牧水会の活動も秋の牧水祭を中心に定着してきて、沼津の文化の一翼を担う位置を占めて来ているように思います。ただ、これらの各イベントへの参加者が、やや、固定化して来ているような感じがそのあたりPR不足なのか、偏っているのか、検討が必要ないように思っています。先日の牧水会総会の席上でも語られましたように、企画の段階での会員の皆さんの積極的なご意見が、より充実した会の活動を保証してくれるのではないのでしょうか。この会報をも含めて忌憚のないご意見をよせてください。

須永 秀生